

子育て広場

小松 歩・佐久間 路子・森山 千賀子・井原 哲人・仲本 美央・
庭野 晃子・瀧口 優*・佐々 加代子**

活動実績の概要

1. 取り組みの経過

2020年度に引き続いてコロナ禍の影響を受けて、広場としての活動は制限されていたが、「地域子育て支援演習」を軸とした「あそぼうかい&世代間交流」については以下のように3回実施した。

5月は対面を視野に入れながら準備したが感染状況が悪化し、やむをえずオンラインでの実施となった。テーマは「春のおかしな遊園地」として学生は大学内の教室を使って演じ、それをオンラインで流した。外部から学内にいれることはせず、あらかじめ申し込んだ家庭に制作資料を郵送し、当日はその資料を一緒に作るということで子どもたちや保護者と一緒に楽しむことができた(子ども24名、保護者17名、一般11名)。

7月はオリンピックも開催されるということで対面での開催となった。テーマは「星に願いを☆七夕縁日」ということで、感染対策とローテーションを組み込んで、J棟からI棟、そして体育館を使っての広場となった(子ども45名、保護者34名、一般11名)。

11月は「さあみんなで行こう～日本一周白梅の旅」として同じく対面で実施した。感染状況も落ち着いており、朝鮮大学の学生も準備から参加しての実施となった。申込制と定員制を組み込み、人数は制限されたが子どもたちも保護者も楽しむことのできた広場となった(子ども36名、保護者43名、一般13名)。

12月には高田文子学長の参加を得てシンポジウムを開催した。コロナ禍のために参加者を多く確

保することは困難であったが、在學生として上級生が活動を総括しながら1年生に子育て広場の意義を伝えていく場として有効であった。

2. 担当教員として

4月から分担して「地域子育て支援演習」の授業を実施しながら学生たちの準備を支援してきたが、1年半にわたって対面での広場開催ができずに、取り組みのノウハウが伝わらない中での広場実施であり、教員として伝えることも少なくなかった。できるだけF11の学生GP室に顔を出し、資料作りなども支援した。チラシやニュースの印刷なども教員が分担して取り組んできた。

「地域子育て支援演習」の授業では学生が担当教員と相談し、どのくらいの時間が使えるのかを調整した。教員はその時間にあわせて講義の準備を行い、授業の後半は学生の準備の支援をしてきた。

実施に当たっては2回から3回リハーサルを行うが、コロナ禍の授業終了後ということで教員が学内にいる条件が必要であった。常に2～3人の教員が対応した。

3. 成果と課題

対面実施での空白があったが、3、4年生やOBの支援があって、イメージのわからない上級生がいる中で、1年生へのイメージ作りを補うことができた。リハーサルや前日準備には必ず複数のOBが参加し、指導や支援をしてきている。17年にわたる積み上げの中でつながりができているという成果が出ている。

また上級生たちは、自分たちが実施する中で学んだことを新しい学生に伝えることを通して自らの成長を自覚し、次へのステップとして位置付け

* 白梅学園短期大学名誉教授

** 客員研究員 白梅学園大学名誉教授

た。12月に開催された第15回白梅子育て広場シンポジウム「コロナ禍で私たちができたこと」では「今後の課題」として①参加者の方とのかかわり方、②学生の連携、③感染症対策の環境設定をあげているが、地域目線、子ども目線に立った課題である。教員集団としては今後もこうした学生たちの成長を保証すべく協力すると同時に、こうした活動を理論的に整理して社会に伝えていく必要がある。